

Introducing Interpreting Studies

著 者 Franz Pochthacker

出版社 Routledge

出版年 2004 年

頁 数 264

ISBN 0-415-26886-9 (ハードカバー)

0-415-26887-7 (ペーパーバック)

評 者 鶴田 知佳子 (東京外国語大学)



この本は、通訳者をめざす人、また通訳を研究分野としてとりあげたい人の両方のためになるようにという野心的な目的を持って書かれている。もともとは、同じ著者が共著者 Miriam Shlesinger と書いた *The Interpreting Studies Reader* とあわせて教科書として使用する目的で書かれており、同書についてもこの本の中で何度も言及されている。(さらに *The Interpreting Studies Reader* は Venuti が 2000 年に出版した *The Translation Studies Reader* の姉妹版として書かれたものである。)

著者はウィーン大学の翻訳通訳学部の通訳担当助教授であるが、最初にこの本は自分の関心学問分野である翻訳研究の観点から書かれていることを断っている。また国際会議やメディアの通訳者としての経験から、この本で包括的に扱っている分野、たとえばコミュニティ通訳や手話通訳の分野ではアウトサイダーとみられている可能性も指摘している。さらに、自分が使える言語には限りがあることから、ロシア語、日本語、中国語といった言語での分野の文献は限定的にしかとりあげることができなかった点をあげている。

本全体は通訳研究という分野の「地図」になればという願いで書かれたものであり、全 3 部 10 章構成となっている。まず、第 1 部「基礎」(Foundations) では主たる概念、通訳研究が独自の学問分野としてどのように歴史的な発展を遂げてきたのか、方法論、研究パラダイム、さらに通訳モデルについて触れている。章構成は、第 1 章：概念 (Concepts)、第 2 章：発展 (Evolution)、第 3 章：方法論 (Approaches)、第 4 章：パラダイム (Paradigms)、第 5 章：モデル (Models) となっている。

続いて第 2 部「主なトピックとリサーチ」(Selected Topics and Research) では、現在までのおもな研究トピックおよび論文の概要が、第 6 章：プロセス (Process)、第 7 章：プロダクトとパフォーマンス (Product and Performance)、第 8 章：実践と専門職 (Practice and Profession)、第 9 章：教育方法 (Pedagogy) という 4 つのカテゴリーにわたって示されている。

第3部第10章は「方向性」(Directions)と名付けられており、今後の通訳研究がたどるであろう傾向、視点、方向が示されている。

地図というだけあって、読者が迷子にならないように、各章はまずその章のおもな論点が要約の形で示され、最後には短いまとめとさらに研究したい人のために出典と文献が示されている。「さらに研究をすすめたい人へ」というセクションは研究者を志す人にとっては特に親切な手引きである。

巻末の Bibliography には豊富な参考文献がある。また Internet Links のセクションには文献や学会誌、国際的な学会や各国の通訳関連機関へのリンクが示されている。索引が2種類 author index と subject index で示され、使いやすくできている。その上、本の中ですでにふれた項目はカッコ書きで、本の他の部分のどこで言及されているかが一目瞭然という、さらに研究者に親切な工夫がされている。

ちなみに日本通訳学会へのリンクも載っており、著者、項目索引では近藤正臣前会長、水野的副会長・事務局長の名前と文献が載っている。ただし著者が言うように文献は著者が読める言語に限られているため、欧米言語に書かれたものに偏っているきらいはある。その点が一つ強いて言えば欠点として挙げられる。

このほかさらに欲を言うなら、これだけ日本で通訳を教育にとりいれているところが増えていることから、通訳教育についてもう少し詳しい言及が欲しかったところである。概してこの本は総花的であり、教科書として利用するにはややカタログ的な感じがするため、特定分野を詳しく研究するための教科書には適切ではない。あくまで通訳研究入門というような授業の場合の教科書に適したものである。

個人的に評者がこれは便利と感じたのは通訳入門の授業で行う説明に使える点である。第1章で、通訳とはどういう仕事か、通訳者の仕事について全部の領域を網羅している。これは通訳入門のクラスで概観を述べるには最適の内容。次の第2章では通訳の仕事の発展のところでネットワーキングについてもふれており、日本通訳学会の成り立ちについても短い言及がある。第5章の通訳モデルについての説明も要領よくまとまっており、いままでの通訳研究の流れを辿るには最適である。

総じて通訳研究についてこれだけ意欲的に広い範囲にわたり言及している本は他にみあたらない中、通訳者になりたい人への入門知識を提供する上で、また通訳研究を志す人にとっての地図・ガイドブックとして、ぜひ手元に置いておくべき1冊といえよう。

筆者紹介：鶴田 知佳子 (TSURUTA Chikako) 東京外国語大学教授。日本通訳学会理事。AIIC(国際会議通訳者協会)会員。コロンビア大学経営学大学院卒業。経営学修士(MBA)。NHK 衛星放送通訳者、CNN 同時通訳者、会議通訳者。近年は実践に役立つ通訳教育法の研究に関心を持っている。
